りました。一方、小劇場がふさわしい緻密な作品で演劇シーズンのレパートリーとして上演を重ねたい作品もあります。今後はそのように、作品に応じ臨機応変に劇場を活かし、よりよい環境で観劇していただけるようにバランスを考えたいと思います。

二〇一八年のレッドベリースタジオ～創造の深まりと新たな創造のはじまり

レッドベリースタジオ主宰　飯塚優子

二〇一七年九月からスタートした「マンスリーピアノ」は、ピアニスト辻千絵さんのコーデネートによる多彩な内容で二〇一八年は八回開催しました。出番が増えたレッドベリーのピアノが見違えるように良い音色を響かせてくれるようになって嬉しいことです。そのほかのライブで年間一四回もの利用があり、アコースティックライブの会場として認知されてきた感があります。初めての登場は、三好紅（ヴィオラ）、板橋文夫（ジャズピアノ）、アドリアーナ（バロックバイオリン、ｆｒｏｍスペイン）等。また九月の井上憲司（シタール）×逆瀬川健治（タブラ）のライブでは、初めて機材を設営して録音を行いました。

演劇で従来と異なる動きは、若い人たちの新しい団体の旗揚げや試演会的な公演が相次いでいます。大学や専門学校のサークルではなく、複数の大学の合同公演や、ＳＮＳで呼びかけられたワークショップ、講座などで出会い、様々なところからメンバーが集まっているのだそうです。このような成り立ちの活動が今後どう発展していくのか、見守りたいと思います。

以下に、年間で特に印象に残った催しを拾って記録します。

三月に開催した「佐々木譲　新作短編朗読会」は、警察小説やミステリーで多くのファンを持つ佐々木さんが、少し違ったテイストの短編を二本、書きおろし、自ら朗読しました。辻千絵さんがニューエイジから選曲したピアノが絶妙。またここで初公開された短編は文芸誌などに掲載されています。

四月、髪立ツカサ独舞公演「馬頭卿」は、舞踏の新しい世代の登場を感じさせる素敵な公演でした。天井のトラスから太いロープで逆さ吊りになった演者の裸体。息をつめて見守るうちに、観るのではなく共に体感する者へと観客の意識が変化します。得難い創造にこの場を提供できたことは嬉しいことでした。

七月の「Ｐａｔｔｅｒｎ ｏｆ ｌｉｆｅ：菊地雅子ｆｉｖｅｒ ｗｏｒｋ個展」は、当麻町の社会福祉法人かたるべの森のアートディレクター・菊地さんの作品

展。壁面を埋め尽くすものは、よく見るとすべて、モノトーンの染料をしみこませた衣類の集積。衣類に宿る記憶が圧倒的な迫力で迫ってきます。会場では、立花泰彦（ベース）×木村朱美（ダンス）によるスペシャルライブも行われました。

一二月「イアンレの種と極〜小林重予の言葉と舞台美術」。二〇一七年一一月に亡くなった造形作家・小林重予さんに向けて、生前かかわりのあった人たちがほぼ一年をかけて検討を重ね、創りあげた追悼の催し。小林さんが書いた文章と、小林さんが舞台美術を手掛けた劇団極のせりふを、極の俳優が朗読しました。

超満員となった会場の熱気、俳優による言葉の力、映像や音楽によって、まれにみる劇的な空間が生まれ印象深いひとときでした。

イアンレの種と極（西山美紀子）

菊地雅子 fiver work 個展

二〇一八年　ドラマシアターども便り

江別・ドラマシアターどもⅣ　安念優子

昨年の九月六日の胆振東部地震、皆さんは被害ありませんでしたか？私の住む江別市は、震度五強でした。

前日五日の台風二一号、ドラマシアターどもの大正一一年建造の煉瓦の三階建て、一階部分入口の弱い個所が、台風の強風で真夜中吹き飛ばされた。

二階のギャラリー・喫茶の内部が一晩中、雨と強風で吹き荒れた。

明け方まだ風の止まぬ中、御近所に散らばった木片などなどを、車で拾って歩いた。

―近くの外輪船の駐車場の大木が五、六本裂けたように倒れている・・。

王子製紙の草地の白樺の倒木も凄い・・。

古い飲み屋街の建物の二階が崩れ落ち、道を塞いでいる・・。

嵐の去った早朝の風景―。

朝から駆け付けてくれた人が居て、壊れた壁の応急処置をした。

そして六日の午前三時の地震。